

学会だより

## 第 103 回 日本消化器病学会総会

多田 稔 小池 和彦

(東京大学医学系研究科消化器内科学)

第 103 回日本消化器病学会総会は、順天堂大学医学部消化器内科教授 渡辺純夫会長のもと、2017 年 4 月 20 日から 22 日の 3 日間にわたり東京の京王プラザホテルにて開催されました。今回のテーマは“未来を創生する消化器病学の展開”であり、主題は 37 題で消化器病領域を幅広く網羅しておりました。

消化管領域では、“ピロリ未感染胃癌とピロリ除菌後胃癌の現状と課題”や“ヘリコバクターピロリ感染胃炎に対する除菌適応追加後の現状”など、最近明らかになってきた除菌後の胃癌発生病変の特徴について議論されました。“抗血栓薬と消化管障害”では、増加している抗血栓薬服薬患者の消化管出血の現状と対策について、“腸内細菌からみた消化器疾患の病態解析—基礎と臨床”や“IBD 治療における生物学的製剤 これからの課題と対策”では、最近のトピックスである腸内細菌に関連した話題や、炎症性腸疾患の生物学的薬物療法の実際などが議論の中心になりました。

肝臓領域は、“C 型肝炎の治療到達点と新たな課題”や“C 型肝炎インターフェロンフリー治療の現況”などで、経口 2 剤による優れた治療成績とわずかながら治療不成功となった症例の特徴について発表されました。また、“NAFLD・NASH 病態生理の

最新知見と治療戦略”や“NASH の新規治療薬の開発及び治験の進捗状況”など肝炎ウイルス発癌後の注目疾患である NASH の話題として、病態のみならず治療についても、今まで報告されていた生活習慣関連薬物治療に加えて、新たに ASK1 阻害剤の可能性について発表があり、本格的な治療へ向けての新たな展望が注目されました。

胆膵領域の“早期慢性膵炎をめぐる諸問題”では、新たに提唱された疾患概念についての検証が行われ、“膵癌治療の最前線”では、術前術後の化学療法の有用性を中心に、幅広い議論がなされました。

そのほか、会長講演は“NASH を考える”であり、特別講演では“iPS 細胞を用いたヒューマン・オルガノイド技術の新展開”が斬新な内容で、多くの聴衆を集めておりました。

京王プラザホテルでの学会開催時の宿命ですが、高層階での主題開催時の問題が残されています。エレベーター移動時の集中混雑に加えて、たとえば今回 IPMN のパネルディスカッションでは席数に対して 120%の参加となり、多くの方が立ち見となりました。それにもかかわらず長時間にわたり熱心に議論に加わっている姿がみられました。